

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月25日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530683

研究課題名（和文） 子どもの共同注意と他者の経験理解に関する研究

研究課題名（英文） 1-year-olds know what others have experienced in joint engagement

研究代表者

大藪 泰（OYABU YASUSHI）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30133474

研究成果の概要（和文）：14 か月児と 18 か月児が 2 名の女性の大人と 2 つの新奇な玩具で遊んだ。3 つ目の玩具では、一人の大人が退室したので、子どもは残りの大人と遊んだ。その後、退室していた大人が部屋に戻り、トレーに並べられた 3 つの玩具を見て、驚いた表情で「それ、ちょうだい」と言った。その大人が欲しい玩具を渡すためには、子どもは（1）他者は注意を玩具に向けており、見なかった玩具を見ると驚くこと、（2）自分は知っているが他者には目新しい玩具を理解すること、ができなければならない。18 か月児では可能であったが、14 か月児では不可能であった。

研究成果の概要（英文）：14- and 18-month-old infants played with 2 female adults and 2 new toys. For 3rd toy, however, 1 of the adults left the room while the child and the other adult played with it. Then, this adult returned, looked at all 3 toys aligned on a tray, showed excited facial expression, and then asked, “Can you give it to me?” To retrieve the toy the adult wanted, infants had to (1) know that people attend to and get excited about new things and (2) identify what was new for the adult even though it was not new for them. 18-month-old infants did this successfully, but not 14-month-old infants.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的認知、共同注意

1. 研究開始当初の背景

共同注意は、一般に、他者の視線をモニターして同一の事物視線を向け合い共有する現象をさす。この現象は人間に特有な営みとされ、乳児のさまざまな精神発達に貢献する（大藪、2004）。近年、共同注意の研究領域は共同意図や共同表象という現象を包摂しつつ拡大され、乳幼児がもつさまざまな社会的認知能力の検討に一層の貢献をしてきて

いる。そうした研究領域の一つに、他者の経験理解の研究がある。他者の経験知とは、他者が経験によって獲得した知識をさす。乳児は他者の「知っていること」と「知らないこと」に気づき、その知識の理解をもとに他者の行動を推論したり、自らの行動をその推論にあわせて調整したりすることが可能になる。この理解が可能になるためには、他者が見ている世界の理解、さらに自分が見た世

界と他者が見た世界との違いに気づきその違いを理解する能力、すなわち自他の視点を切り替え、他者の視点から出来事を見る能力が必要とされる。このため、他者の他者の経験知の理解には3~4歳で獲得される「心の理論」が必要だとされ、2歳以前の子どもには、この他者の経験知の理解は困難だとされてきた。

近年、特定の共同注意 (joint engagement) 場面では、1歳前半の子どもには他者が経験から獲得する知識の理解が可能であることを欧米の研究が示唆し始めている。しかし、乳児の他者の経験知理解に関する知見は、欧米の研究に限定されており、本邦での検討は行われていない。本研究では「実験者不在パラダイム」を用いて、実験者との共同注意的関わり経験による14か月児と18か月児の他者の経験知理解への影響を検討した。

2. 研究の目的

本研究では、14か月児と18か月児を対象にして「実験者不在パラダイム」を用いて、実験者との玩具を介した共同注意的関わりがわが国の1歳児に対しても他者の経験知の理解を可能にさせるかどうか検討することを目的にした。

3. 研究の方法

(1) 実験参加者

東京近郊に住む1歳児とその母親72組(14か月児24組、18か月児48組)であり、各月齢とも男女同数であった。

(2) 実験場面

早稲田大学文学学術院発達心理学研究室で、母子と女性の実験者2名との自由遊びの後、テーブルを囲んで、母親、第1実験者(E1)と第2実験者(E2)が椅子に座り、子どもは母親の膝の上に座った。母親の正面にE1が、左側にE2が位置した。

① プレテスト

E1の要請に対する子どもの玩具選択能力を確認するためにプレテストを行った。E1は子どもと3つの玩具(車、ボール、クマの縫いぐるみ)で順番に約1分間遊んだあとで、どれか1つの玩具を手渡すように要請した。要請された玩具に手で触れなかった子どもは、玩具選択能力がないとみなし、分析データから除外された。

② 本実験

プレテスト終了後、本実験に移行した。本実験では、3種類の手製の抽象的な玩具が使用された(図1)。この3種類の玩具を子どもが手に取って選択する確率に有意な差は見られていない。



図1. 3種類の手製玩具

<実験条件> ランダムに決定された最初の玩具を、E2がE1に手渡した。E1は、子どもにも玩具に触れさせながら共同注意を成立させ、1分間操作して見せた。その後、E2へ玩具を戻した。E2はその玩具をトレーに置き、2つ目の玩具をE1に手渡した。E1はこの玩具でも同様に共同注意を成立させ、1分間操作した。その後、E2へ玩具を戻した。E2はこの玩具もトレーに置いた。その後、E1は退室した。E2は3つ目の玩具(ターゲット玩具)で子どもと遊んだ。1分経過後、E2はターゲット玩具をトレーに置いた。そこへE1が入室し、驚いた表情で子どもの目を見て、穏やかに「それ、ちょうだい」と言いながら手を差し、手渡すように要請した。

<統制条件> E1はランダムに選ばれた3つの玩具のすべてで、子どもと共同注意をしながら遊んだ。3つ目の玩具を使った遊びが終わったら退室した。約2秒経過後、E1は部屋に戻り、E2がトレーに置いた3つの玩具に対して実験条件と同じように玩具を手渡すように要請した。

<評定者間の信頼性> プレテストと本テストともに、ビデオ映像を使って、参加児の25%の映像を対象に手渡し行動評定の信頼性を検討した。いずれも評定者間の一致率は100%であった。

4. 研究成果

実験条件の3種類の玩具を選択した人数を月齢別に示した(図2、図3)。

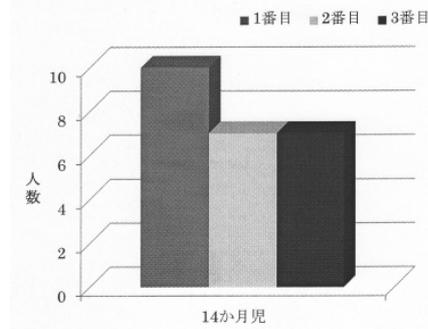


図2. 14か月児の玩具選択

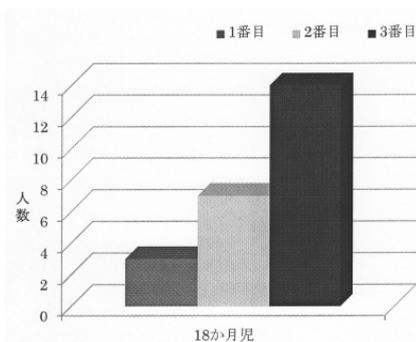


図 3. 18 か月児の玩具選択

ターゲット玩具を選択したか否かのカテゴリー化に対して、二項検定を用いて各月齢群のターゲット玩具選択数をチャンスレベルと比較した。18 か月児群だけでチャンスレベルを有意に上回った ($p < 0.002$)。それゆえ、別の 18 か月児群を設定し、統制条件でも検討した。14 か月児群と 18 か月児群の比較と、18 か月児の実験条件と統制条件の比較を、Fisher の正確確率検定を用いて行った。その結果、14 か月児群と 18 か月児群のターゲット玩具の選択率の差に有意な傾向が見られた ($p < 0.08$)。また実験条件の 18 か月児は、統制条件に比べて有意に多くのターゲット玩具を選択していた ($p < 0.04$)。

本研究から、Tomasello & Haberl(2003)などの欧米の研究結果と共通する結果と相違する結果が得られた。共通する結果は、生後 18 か月時点ではいずれも他者の経験知の理解が可能だということである。つまり、共同注意場面で自他の視点を切り替え、他者の視点に立って出来事を理解する能力は、1 歳半までには確実な能力として獲得されることが予測される。しかし、ドイツ(Tomasello & Haberl, 2003)では 12 か月児で可能とされたこの能力は、本研究の 14 か月児では見いだされなかった。Grossman ら (1985) は、この時期のドイツと日本の子どものストレンジ・シチュエーション法でのアタッチメントパターンが大きく異なることを見だし、その違いはドイツでは乳児期から自立した存在であることを重視するが、日本では相互依存的な関係を重んじるという育児文化の違いによる可能性を示唆している。

本研究で見出された日本とドイツの他者の経験知の理解の発達差が、両国の育児文化の違いによるかどうかは不明である。しかし、他者の経験知の理解は、文化を介在させて発達し、能力が深化していく可能性はあるだろう。他者の経験知の理解は、誕生日前後ではいまだ揺籃期にあり、実験者との対面した場面がもつ緊張した経験を処理する日本とドイツの乳児の精神機能の違いが反映される

可能性が示唆されるのである。

今後の共同注意研究が、乳児による他者の経験知理解における普遍的な能力と文化による差異を明らかにすることを期待したい。

【引用文献】

Grossmann, K., Grossmann, E. K., & Spangler, G. (1985) Maternal sensitivity and newborns' orientation responses as related to quality of attachment in Northern Germany. In Bretherton, I. & Waters E. (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. Monographs of the society for research in child development, The University of Chicago Press, 222-256

大藪 泰 (2004) 共同注意—新生児から 2 歳 6 か月までの発達過程— 川島書店

Tomasello, M. & Haberl, K. (2003) Understanding attention: 12- and 18-month olds show what is new for other persons. *Developmental Psychology*, **39**, 906-912

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

① 大藪泰、石渡夏美、森悠香子、山中尚子 1 歳児の共同注意場面における他者の経験知理解を検討する実験構造について 第 21 回日本乳幼児医学・心理学会プログラム・抄録集、2011、p. 15

② 大藪泰、石渡夏美、森悠香子、山中尚子、中村健太郎 1 歳児による他者の経験知理解と共同注意 日本心理学会第 76 回大会発表論文集、2012、p. 971

〔図書〕(計 2 件)

① 大藪泰 マルチモダリティと他者理解 日本発達心理学会編 『発達の基盤：身体、認知、情動』 新曜社、2012、pp.192-204

② 大藪泰 赤ちゃんの心理学 日本評論社、2013 (印刷中)

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大藪 泰 (OYABU YASUSHI)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30133474

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし